

<b>Title</b>	青年の心的現在
<b>Author(s)</b>	牟田, 隆郎
<b>Citation</b>	聖学院大学論叢,18(2) : 277-291
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=115">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=115</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## 青年の心的現在

聖学院大学人間福祉学科 1 年生の抱いた「疑問」をもとに

牟田 隆 郎

The Inner World of Current Adolescents

Based on research conducted among freshmen in  
the Human Welfare Department at Seigakuin University

Takao MUTA

---

Key words: Life and Death, Neoteny, Question, Self-Formation, Sociability

### はじめに

青年期は「疾風怒濤の時代である」、とは青年心理学の開祖ホール(Hall.G.S.)の言葉である。確かにそのような面がないとは言えないものの、最近の青年たちの様子は、疾風怒濤とはあまり縁がないように見える。

荒れ荒んだ青年がいることは確かなのだが、全体として今の青年たちを眺めると、一言で言えばどうもおとなしいのである。それは良いが増えてきているというのともちょっと違い、何やら今の青年たちが、内向きに生きているという感じがするのである。大人たちに対してそのような姿を見せているだけなのかもしれないが、多少気になる昨今の青年のあり様ではある。

そこで、彼ら彼女らの内的心的生活に探りを入れてみよう。表に見えているものとはまた違った様子が、内的心的なところに現われているかもしれない。用いる資料は、聖学院大学人間福祉学科 1 年生(2005年4月入学生)が記述したもの(筆者が講義で課した「人間について知りたいこと、疑問に思うことを記述せよ」への回答)<sup>(1)</sup>である。

### 知りたいということ、疑問をもつということ

青年たちの内的心的生活を分析する前に、ここでそもそも「知りたい」「疑問をもつ」というこ

とはどういうことなのかを、簡単に押さえておこう。

人間も「生き物」であり、自分のまわりの状況を知覚し、認知し、認識することが生きていく上で必要なことは言うまでもない。情報を収集し、自らの生存を安きものにするのを、普通は無意図的に行なっている。加えて、人どうし互いに社会を営みつつ生活していくということも必須であり、ここにおいても、情報の収集と経験の蓄積は大切なものとなっている。こうして各人の内部に「生き抜いていくための知恵」とでもいうようなものが形成されていく。私たちは無数の「やりくり」を通して、片や「世間」を同定し、片や「自分らしさ」を固定させていく。

ところがこの世間であれ自分らしさであれ、継続し安定して一定のものであるということの保証はない。世間・世界は変動しつつあり、かつ自分らしさというものも、時や経験を経て変わりうるものであることは周知のことであろう。人は変わりうる存在である。

人が変わると、その人にとっての世間・世界も変わっているはずであるのだが、この論議はここではこれ以上行なわない。自分らしさも世間・世界も、一応それぞれ構造・機能やシステムを作り上げていると見なすことができるが、これらは「動的バランス」をとって成り立っているものと思われる。動的ということは可変的であるということでもあり、この可変性・可塑性を有しているということが、生き物として大切な部分である。

また大脳というものはそれ自体、外部からの刺激を常時必要としており、その意味で情報によって起動させられていると捉えることができる。つまり、新奇な刺激を常に求めていると言える。この刺激とは、知的なものはもちろん、継続的にもたらされるものや、さらに情動系を喚起するような情緒刺激も含むものである。

さまざまな情報を取り入れて（発信して）私たちは生き続けているわけであるが、食べ物の摂取がそうであるように、取り入れたものがそのままのかたちで貯蔵されるわけではない。それらを自らにとって必要な状態のものに変えて利用する。情報も全く同じであり、その取捨選択はもちろんのこと、それまでの脳の「世界を映し出すシステム」に変更を加えつつ、新しい「世界（イメージ）」新しい「自分（イメージ）」を作り続けていくことに利用される。認識だけではなく、どのように行動するかといういわば出力系のシステムにおいても、この変更はやはり行なわれ続ける。

この一連の過程は、ほとんどが無意識的に進んでいくものと思われる。特に睡眠中にこの内的システムの整備・変更がなされるようである。この現象において「自己組織性」が発揮されていると捉えても、おそらく問題はないであろう。私たちの脳は、かなり勝手に世界を見てとる枠組みであるとか、私たち自身の自己像などを自発的に構築している。

もちろん「メタ認知」的な機能も私たちの脳は兼ね備えているわけであり、そこで意識化できるものもかなりあることになる。そして意識的・主観的に、世界なり自分なりのイメージを作り上げることにも可能なことは当然である。こうして私たちは「主体感」を取り戻し、「自分」が世界を認識し「自分」が自分のことを把握しているという感覚を保つことができる。

この際に、この内的システムは動的システムであり、ということは常に変化の芽を抱えているとも言えるわけであり、その変化や変化の兆しが意識化された時に、「知りたい」とか「疑問がわき起こる」ということになってくる。知的好奇心なり猜疑心なりは、内的システムが要求していることの意識への現われであり、かつそれは「生存」をひとつの大切な目的とする生き物の戦略の一端を担うものである。

## 疑問をもつということと、人の生き方・あり方との関連

疑問をもつということが、生き物的戦略のある部分を担っているということについて、もう少し考えてみよう。疑問をもつということには、もちろんいろいろな状況が関係する。強いて分ければ、知的好奇心から生じる疑問もあれば、何かおかしいとか変だといった感覚から生まれる疑問がある。前者はどちらかといえば、内発的で前向きな知的システムのレベルアップや充実を目指すものであり、後者はどちらかといえば、今の自らのあり方というものに何らかの疑義を投げかけることに関わるようである。

従って知的好奇心由来の疑問は、その個体が現在かなり安定した状態にあることを基盤にしているようであり、他方、「おかしい」「変だ」のほうの疑問は、その個体の今の状態に何らかの不安定さがあることを示唆している。

もっとも知的好奇心の場合においても、その個体の知的システムが一種の不安定状態にあるからこそ、新しい知的な構造の組換え圧力が生じているとも言える。知的な関心は、自己増殖的な性格（もっとも知りたい）をもちやすいからである。そこから常に疑問が生成される余地が生まれている。

主としてその個体の状態（システム）に不安定さがあることにより提出される疑問は、同時にその不安定さを解消し、ひいては、その個体をより「生きやすく」させることを暗黙の目的としているようである。今（今まで）のその個体のあり方に、何らかの変化を促す圧力がはたらいているわけである。もっと言うならば、今（今まで）の生き方にどこか無理や片寄りがあり、意識しているかないかは別として、「自分システム」がその「生き辛さ」を解消する方向に変化を志向しているのである。

このようにして、差し当たって私たちにとっては、知的好奇心由来の疑問はそれはそれとして尊重しつつも、主として個体の不安定さ由来の疑問の背後に目を向けることが、その個体の今（今まで）のあり様（やりくり）というものが、何をテーマとしているか、何を課題としているかを探る上での有力なヒントとなるようだ。特にそれらの疑問が対人間のものである時、なおさらその個体の生き方・あり方のいわば先端的なものが浮かびあがりやすいものと思われる。

なお知的好奇心由来の疑問の場合でも、実は自分システムの不安定さとどこかで結びついて出て

くることもありうる。一種の知的防衛とでも言うか、知的なかたちをとりつつ、半ば無意識的にではあるが、抱えもつ不安定さを克服しようとするを、人はよくするからである（知性化）。こうしてみると蛇足になるが、純粋な知的好奇心を抱ける人というのは、かなり幸運な人と言えるのかもしれない。

### 調査結果（「人間について知りたいこと、疑問に思うこと」の問に対する回答）

自由記述法をとったため、回答は実にさまざまであった。しかし回答はほとんど短文で記述されており、ある程度似通ったものを束ねることは可能であった。以下、内容に基づいてその数が多いものから順に列記するが、数が多いので、2名以上から得られた回答に絞って取り上げる<sup>(2)</sup>。なお、文末尾のカッコ内の数字は人数である。また、同じ人数出された回答の提示は順不同である。

- 1) なぜ人は感情をもっているのか(11)
- 2) なぜ個性・個人差があるのか(9)
- 3) なぜ人は悩むのか(5)
- 4) なぜ人は嘘をつくのか(5)
- 5) なぜ人によって性格の違いがあるのか(5)
- 6) なぜ人には悲しみや苦しみがあるのか(4)
- 7) なぜ涙が出るのか(4)
- 8) なぜ人間は他の動物より知能が高いのか(4)
- 9) なぜ人は死にたいと思うのか(3)
- 10) なぜ好き嫌いというものがあるのか(3)
- 11) なぜ人は恋をするのか(3)
- 12) なぜ人間は生まれたのか(3)
- 13) なぜ人は顔が違うのか(3)
- 14) なぜ人には学習が必要なのか(3)
- 15) 血液型と人の性格は関係するのか(3)
- 16) なぜ人は群れるのか(2)
- 17) 相手の本心・気持は何なのか(2)
- 18) なぜ人によって感受性が違うのか(2)
- 19) 人の性格はどのようにして形成されるのか(2)
- 20) 心とか精神とは何なのか(2)
- 21) なぜ人は自殺するのか(2)

- 22) なぜ人は学ぶのか(2)
- 23) なぜ人は大勢と違うことを恐れるのか(2)
- 24) なぜ仲の良い人悪い人ができるのか(2)
- 25) なぜ好きという感情がわくのか(2)
- 26) なぜ人はひとりでは生きていけないのか(2)
- 27) どうしたら人とうまく付き合えるのか(2)
- 28) なぜ人はお互いを比べるのか(2)
- 29) 人は何を目的として生きているのか(2)
- 30) なぜ人には右利きと左利きがあるのか(2)
- 31) なぜ人は夢を見るのか(2)
- 32) なぜ人はこのような形をしているのか(2)
- 33) なぜ人は考えるのか(2)
- 34) なぜ人は言葉を話せるのか(2)
- 35) なぜ人は2足歩行なのか(2)
- 36) なぜいろいろな人種があるのか(2)
- 37) 人の心理はどのようにしたら分かるのか(2)

2名以上が回答した「疑問」は37通りであった。なかには同じような類いのものもあるが、それらは次の解説の中で一緒にして考えていくことにする。

## 解 説

全般を眺めてみると、たいへんまともな疑問が出されているという感を抱く。それらの問いかけは、答えるのが一見簡単なようであっても、その実そこに難しさを孕んでいる。当然問いのいわば深淺はあるのだが、端的に投げかけられた疑問というもののもつ手ごわさがそこにある。

さて全部をこと細かに取り上げるわけにもいかないが、数の多い疑問から順に吟味していこう。青年たちの内的心的生活がいったいどのようになっているのか、これら数々の疑問の背後にあるであろうそれらの内的現実について推察してみよう。

### 『1) なぜ人は感情をもっているのか(11)』

この疑問がトップに来るとはちょっと意外な感じがしなくもない。この年代の青年たち(多くは20才少し前)は、人間関係や恋愛などに多くの関心を割いているのではないかと思っていたからである。もしかすると現代青年は、人と人との「間」よりも、自ら自身の内部への関心を強めている

のだろうか。

しかしよくよく考えてみると、「感情」というものは、まさに「関係」を表わすものではないだろうか。感情には確かに自己完結的な面がなくもないが、その多くには何らかの対象の存在が不可欠であると思われる。感情の多くは、相手なり対象なり状況なりに向けて発せられるものである。それはまさにその人とまわりとの関係のあり様の表現のひとつとなっている。

一般に情動系のはたらきは、環境の探索を背後で支え、環境を無意識的に評価し、なおかつ身を守るというところにある。「なぜ人は感情をもっているのか」という疑問は、その人とまわりとの「関係」とかまわりとの「あり方」に対する戸惑いであるとか、困難さが生じていることを示しているのではないか。しかもその感情とは相手が発するものであることもあれば、本人自身のもの、場合によっては両者のものでもあるのだろう。

いずれにしても、他者との関係における戸惑いや困難を、知的な理解で掴もうとするよりも、感情といういわば生き物的な物差しではかっているようである。そうであるとすると、青年たちが人間関係を見定める上で頼っているのは、知性的な把握ではなく、もっぱら生き物的（動物的・身体的）感性になっているのかもしれない。

であるとすると、この感覚は一面たいへん鋭いものではあるが、時にお互いを引き離してしまうリスクをもたらす。「ウゼエ」「キモイ」「ムカツク」などといったいわば感覚語で、相手を弁別し遠去けて評価することになりがちである。言うなれば、身体的・皮膚の感覚で他者を判別してしまっているようである。

これは一種の他者認知の「ネオテニー化」と言えるのかもしれない。ネオテニーとは生物学でいう「幼形進化」のことであるが、理性ある人間どうしが協調し合うという構図が成り立たず、身体感覚的・皮膚感覚的な他者の見きわめのレベルに、あと戻りしてしまっている可能性がある。けれどもネオテニーという捉え方は、何か行き詰まったとしても、そこでの限界を乗り越えて新たなステージに移行するための戦略、という風にも理解することができる。

その意味からすると、青年たちの示すこのあと戻りしているかに見える様相は、これからの人間どうしの関係のあり方の、何かの示唆なのかもしれない。もちろんこの考えは仮説であり、他の疑問を読み解くなかでまた触れてみたい。

## 『2) なぜ個性・個人差があるのか(9)』

この疑問は、一応一般的なかたちをとってはいるが、内実は、自らと他者との「関係」「関係のあり方」に焦点があることは間違いない。自分がどういう人間であるのか、どういう人間になろうとしているのか、他者という存在は、そのことの認識において参考にもなるし戸惑いや妨げにもなる。

大学に入学したばかりの彼ら・彼女らであるが、「社会」が現実的にうっすらと視野の彼方に入

り始めるこの時期、なお一層自分という人間がどういう存在であるのか、知らず内面確立の仕上げに向けての突きあげを感じとっているようである。その際まわりにいる同年代の人たちの趨勢は、何より参照すべきものである。

他者に視線を向けると同時に、やはり彼ら・彼女らは、自らがどう見られているのかにも気を配る。自己点検をする目は内面に向かいやすくなる。自分で自分のことを漠と意識する流れと、この内面に向かった視線が合流し、自らの個性・自分らしさというものについて考えることが多くなる。

他者の個性をそれと認識するということはまた、自らの個性との違い(個人差)を意識することであり、ひいては自らを確認することである。確認してそれで終りというわけではない。自らに関して何か不十分さや課題を感じとったならば、それを解消しようとする心的ベクトルが生じる。解消するかどうかは状況にもよるが、うまくいかないと劣等感の源となることもある。

時には他者との差異を認識することが、劣等感ではなく優越感と結びつくこともある。個性や個人差というと、横並びでの互いの相違というニュアンスがあるが、青年たちの心の中では、他者と比べて自分が上か下かという序列意識もまたとても生まれやすいものである。この上下の意識が表面化しそうなところをぐっとこらえ一歩距離を置いて、個性とか個人差というニュートラルな捉え方をしているかの如くである。

### 『3) なぜ人は悩むのか(5)』

この疑問はまさに、彼ら・彼女ら自身に関わるものである。自らが悩みの渦中にあることをこの疑問は示している。しかし悩みを抱いているとは、こちらからすればむしろほっとする事態である。なぜならば、「悩む」ということができるにはそれなりの成長があり、それなりに認識力や情緒の成熟が果たされていなければならないからである。一言で言えば、「力」がついていないとじっくり悩めないのである。

それでは力がついていないとどうなるのか。始終イライラ・ムシャクシャしやすかったり、身体症状が出たり、嗜癖にはまったり、対人関係に著しい片寄りが生じたり、衝動的に行動してしまったり、不安や焦りにさいなまれたりし、しかもなぜだか知らずそうなってしまっている。

もちろん悩みを抱えていること自体がストレスの基でもある。しかし、その悩みが本人においてかなり意識化・対象化されているのならば、既に彼ら・彼女らはその悩みの解決の入り口に立っている。漠然とイライラ・ムシャクシャしているのと、課題がはっきりしていることは全く違う。なかには解決不可能な悩みもあるだろう。それでもそのことを自らの課題として自身の内に保持し続けることは、とても大切なことなのである。

この疑問をはっきりしたかたちで提出したのは僅か5名であるが、「なぜ人は悩むのか」という問いを出すことができること自体が、悩む力を持っていることを示しているのに加え、さらに然るべき成長がもたらされていることの証であると感じられる。買い被り過ぎであろうか。

『4) なぜ人は嘘をつくのか(5)』

これも大きなテーマである。なぜ人は……の「人」とは、本人の場合もあれば相手の場合もある。自らがついてしまった嘘に心の痛みをどこか感じ続け、あるいは相手の嘘によって負った傷みを克服しようとしているようである。どちらかといえば、自らがついてしまった嘘にこだわりを抱いている場合のほうが多いかもしれない。

ところで嘘をつくのは青年だけではもちろんないわけで、年齢・年代は問わない。誰でもが何かのかたちで嘘はついたはずである。さて、何か青年たちにとっての「嘘」「嘘をつくこと」の特別な意味はあるのだろうか。

恐らく青年たちにとっての嘘というのは、彼ら・彼女らの生活において、大きな心の振幅をもたらしやすいのであろう。小さな子どもならば、ほとんど無意識的に嘘をつく。やむをえず立場の弱い自分を守るためである。出来上がった(固まった)大人ならば、嘘はある程度慣れっこであり、生活していく上での必要悪ぐらいに割り切ることもできなくはない。嘘も方便というわけである。

青年たちにとっては、子どもや大人と同じというわけにはなかなかいかない。なぜなら彼ら・彼女らの「自分」は、純真ひと色でもなければ固まってもいないからである。まさに形成途上の、たとえば半熟卵のような自我を抱えている最中だからこそ、嘘のもつ衝撃はそれだけ大きいのである。どういう自分をこれから作っていかようとしているのか、まさにそのまただ中にあるからこそ、自分をどう表わし、他者をどう受け入れるのか、その過程に時として生まれてしまう嘘に、より敏感になるのである。

青年たちは作ってきた自分、見せている自分、かのように見えている他者、それらをめぐって意識化されている部分と感じとっている部分の乖離に過敏になっている。青年期の人たちにとって嘘とは、自らのあり方に深く関わっている事柄なのである。

『5) なぜ人によって性格の違いがあるのか(5)』

これは2)の「なぜ個性・個人差があるのか」と似たような疑問である。一緒に考えてもよいのだが、「性格の違い」という表現のなかに、身近かな人たちとの関係がかなりそこにイメージされていると感じられたため、敢て分けて取り上げた。

恐らく日常の人間関係のなかで、しばしばこの疑問を抱いているのであろう。「違い」に目を向けているということは、やはり他者との関係がスムーズにいかないことが問題になっているものと思われる。

人と人とは性格という面に限らず、さまざまな面においてかなりのものを共有しているものであるが(だから社会を営める)、私たちは顔の認知を手始めに、他者との相違を、多分実際以上に拡大して認識するところを備え持っている。たとえば事物の視認知で、脳神経細胞の示す側抑制という現象を筆頭に、輪郭をはじめ事柄・事態を区分けして取り出し、それにラベルを貼るという高等

能力を人間は手に入れている。この能力は、対象をどうしても分化して把握することに結びつきやすい。性格の認知も、恐らく事情は同じようなものであろう。

さて、他者との関係の不一致・不協和が気になるということであるが、関係全般をはかってそう捉えるのではなく、「性格」という言葉に象徴的に関係不全・困難を負わせているものと察せられる。他者を眺め、他者との関係に揺さぶられ、自らの内面に気づかされといった循環・連鎖が、性格という概念のまわりでグルグル回っているようである。そして究極には、自らのあり方という課題に、彼ら・彼女らは重く突き当たっているのである。

## 生と死のテーマ

以上、人数の割合多い上位5番目までの項目について検討してきた。残りは32項目（2名以上指摘したもの）があるが、ここからは似たような性質のものを束ねて考察してみたい。

まず『9)なぜ人は死にたいと思うか(3)』と『21)なぜ人は自殺するのか(2)』を取り上げる。「死」に関わる項目が37項目のなかで2つだけ（5名）というのは少ないと思うかもしれないが、青年期の人たちにとっては、死の問題の位置づけは、意識面ではこの程度のものかもしれない。

さてこの疑問を呈した人たちは、もちろん一般的な疑問として死や自殺のことを取り上げたのではないと思われる。身近な人の自死に直面したことがあれば、このように思うことは有り得なくもないが、やはり自らのものとしての死がどこか気に懸かっているのであろう。死を明確に意識するのは人間だけである。このことは、「自分・私」というものをはっきり意識化できることと深く関係し、ひいては、言語やイメージを駆使し、高度な認識力を獲得したことと無縁なことではない。

そしてこれら死に関する疑問は、『12)なぜ人間は生まれたのか(3)』とか、場合によっては『29)人は何を目的として生きているのか(2)』という疑問と相補的である。生と死のテーマである。人生があることのテーマと言ってもよいかもしれない。

もちろん死のテーマについては、今生きていること・今まで生きてきたことの中に、死を求めたくなるような苦悩がそこに伴っていることも十分考えられる。生のテーマに比べ死のテーマの場合には、「現在」のもつ意味が軽くなってしまっている趣きがある。私たちは時（カイロス）でいえば「現在」や「今」しか生きられない存在である。従って現在・今があまり充実していなかったり、ましてや苦しみや悩みに晒されていると、現在・今は根拠が薄いものとして体感されるものとなる。

もっとも12)や29)の「生」の疑問においても、こうした問いが出される裏には、現在・今がいささか停滞している様子が窺える。ちょっと立ち止まったり立ち止まらざる得ない時に、このような疑問は浮かびやすいからである。

いずれにせよ「死」の問題の背後には、現在・今の生きにくさから派生した現実逃避的な心性が

はたらいっているようである。もちろんこのことは、日常に流されやすい中であって、なおかつ死(生)のテーマにこだわることの大きな意味を認めた上でのなしである。

## 個と集団のテーマ

個と集団、自分と他者のテーマも青年たちにとっては大きいものようだ。『6)なぜ人は群れるのか(2)』『23)なぜ人は大勢と違うことを恐れるのか(2)』『26)なぜ人はひとりでは生きていけないのか(2)』などがこのテーマにストレートに関わるものと思われる。加えて『24)なぜ仲の良い人と悪い人ができるのか(2)』『27)どうしたら人とうまく付き合えるのか(2)』『28)なぜ人はお互いを比べるのか(2)』などもこのテーマにかなり関係している。

個と集団の問題も煎じ詰めれば「個の形成」「自分の形成」の問題になる。自分をみんなの中でどう作り上げ保っていくのか、そのことが青年たちの大きな課題となっている。一見すると、自分が他者の群れにどう加わったらよいのか、という疑問のかたちをとってはいるが、内実は、彼ら・彼女らがまさに自分形成の途上にあることを物語っている。集団や世間や社会を、つまりは他者性をどう自らの内にとり込み、自らのパーソナリティの一部として我がものにできるかできないか、この年代の人にとっては、これも重要なテーマである。

他者性をみずからの内にうまく取り込むことができれば、その他者との日常での交わりはスムーズにいきやすくなる。他者とはその場合、否応なく自我親和的なものだからである。それがうまくいかないと、他者は自我異和的なものとして目に映りやすくなる(被害感にも通じる)。

ところで「他の誰でもないこの独自の私」の形成ということになると、他者性を自らのパーソナリティにあまり内在化させないほうが、自らの独自性を築きやすいと思いたくなる。しかし事態は全く逆であり、他者性を十分に内在化させたその先にしか己れの独自性は成り立たない。成り立つかに見えたとしても、それは単なる世間知らずの極端なものである。ある意味他者にまみれたその延長上にしか、個性化は進展しない。

この点青年たちは、一方で強く個性化を志向しながらも、他者にまみれることによる自己の分解を怖がっている。どこかでは恐らく、他者との交わりのその向うに自分の独自性が拓けてくると感じつつも、彼ら・彼女らは未だ不十分な「今の自分」を、さて冒険に踏み出させたものかどうか、大いに迷っているのである。

この他者・集団を前にしての青年たちの逡巡は、いつの時代にあっても見られたものと推察されるが、「1)なぜ人は感情をもっているのか」のところで考察した他者認知のネオテニー化の問題と絡めて考えることも必要であろう。もしも青年たちの中に、他者・集団から幾らかでも撤退しつつある徴候(社会性の低下)があるとすれば、現代青年の自己形成における他者性の希薄化は、密かに進行しつつあるのかもしれない。そうであるとすると、自己形成における「個性化」の力はむ

しろ弱まってしまっていると考えられる。

## 異性との関係

人はもっぱら青年期において「異性」を発見する。自分とは異なる「性」を意識し、対異性の思いや行動のもろもろを、自己形成（他者理解）の手がかりとする。同時に自らの内に揺れ動く気持ちの処理に手こずったりもする。そしてそこに疑問も生じやすくなる。『11）なぜ人は恋をするのか（3）』『25）なぜ好きという感情がわくのか（2）』となる。また『10）なぜ好き嫌いというものがあるのか（3）』『17）相手の本心・気持は何なのか（2）』も、もしかしたら恋愛感情と関係しているかもしれない。時には『7）なぜ涙が出るのか（4）』もこれに一枚加わっている可能性がある。

対異性の想いはかなり強いものであり、人によってはその想いをもち余したり、戸惑いが強くなったりする。内心の揺れが大きければ自我は不安定になりやすく、感情の起伏も大きくなりがちとなる。少年期・少女期をまあまあ安定的に通過してきたとしても、この時期不安定になることは免れにくい。

それだけに「世界が変わる」と言ってもよいぐらいの体験をする若者も出てくる。新しい自己を肯定的に形成できる人もいるかわり、自己形成に躓いてしまう人も現われる。「世界」の変わりようは、その方向によってまるで違う結果をもたらす。人の一生は滑らかに変化していくというよりも、ところどころに「節」のようなものがあると思うが、この恋愛という節は、人を大きく変えてしまうだけのインパクトをもっている。

異性との出会いをきっかけに、自らを省み、お互いの関係を反芻し練り上げ、相手を理解し受け容れる……という循環を経つつ、自らのあり方を確認し自己を形成していく。他方、ありのままの自分に自信を抱けず、お互い依存し合ったり傷つけ合ったりし、相手へのそして自分への不信感を募らせてしまうことも起きてくる。友人どうしの関係でもこうしたことは生じるのだが、対異性関係においてこそ、この循環は激しいかたちで現象する。

もちろんそこに強い性衝動が根底ではたらいっていることも無視できない。人格をどう彫琢するかという大仕事に、性衝動が深く関わっていることが、青年たちの心の揺れを大きくする。衝動は対象を手段化するかたちでもっぱら発散される。ややもすると相手の存在を手段化してしまいかねない危うさを、どう相互の人格の交流関係に昇華できるのか、そのことが厳しく問われている。当然強い葛藤が生まれやすくなる。これはまさに試練である。

異性に向き合うこと自体既に試練でもあるが、この試みに一步距離を置こうとする青年がいることも忘れてはならない。恐らく自分の内面がまだ多くの不安定なものを抱えているという感覚が強いのであろう。自己を開示していくにはまだ準備が整っていないとうすうす感じていたり、過去の傷ついた体験を引きずっているために、慎重になっているようである。いずれにせよ傷つくという

こと、自尊感情が傷むということに敏感になっている。対異性の場合、よりはっきりと「安全距離」を保とうとする態度が生じやすいのであろう。

## 内面世界への関心

人の眼差しは外部世界・環境世界に向けられると同時に、内面世界・心的世界にも向けられる。この両世界の狭間に成立するのが「自分・私」というものであるが、人のもつ独自性とはこの内面世界への眼差しをもつことができる点にある。

まず『6)なぜ人には悲しみや苦しみがあるのか(4)』という疑問を取り上げよう。この文の中の人とは、やはり自分でもあり他者でもある。悲しみであれ苦しみであれ、人は他者の中に存在して自分を形成していくからこそ、その感情体験とその表現(言葉)とが一致する。いわば文化が感情を特定していく。

また青年期は、外部 内部への眼差しが大きく振れる時期であり、内部への眼差しは時として自らの影の部分、陰陽で言えば陰の部分に向けられがちである。その背後には強い自己確立の動機づけがはたらいており、一見するとマイナスの部分をも、より大きな自己へと統合していくダイナミックな成長運動が起きている。そこで、悲しみや苦しみに目が向きやすくなっているというわけである。

さて他者と自分との比較も頻繁になされ、『18)なぜ人によって感受性が違うのか(2)』とか『19)人の性格はどのようにして形成されるのか(2)』『37)人の心理はどのようにしたら分かるのか(2)』という疑問も出される。ここでも問いは一般的なかたちをとっているが、他者を媒介にして自分を見つめ直しているようだ。他者の発見と同時に自分自身への気づきが展開されている。

彼ら・彼女らにとって「他の誰でもないこの独自の私」をいかに作っていくのか、外部 内部と目まぐるしく動く眼差しは、自己確立をもたらすための基礎作業である。

## 存在への問い

「自分・自己・私」の確立の戦いは、また一方で自らが存在すること自体への問いかけをも産出する。「生と死のテーマ」の項で取り上げた『12)なぜ人間は生まれたのか(3)』という疑問には、存在それ自体への問いかけにつながるところがある。存在への問いは究極の人間的問いであると私は考えるが、青年期においてこそこの問いかけが生まれ出る。青年期に人は哲学者となる。

存在への問いかけに近いものとしては、『20)心とか精神とは何なのか(2)』があげられる。心とか精神とは世界や私が現象する「場」であり、また存在を存在たらしめるものである。心や精神と言わずに「人」と言っても良さそうなものであるが、そこには幾らかの飛躍がある。それは、個別的存在という側面を抱えているのが人であるとすれば、心や精神は、個別的存在を超えるところ

をもっているということである。

私たちひとりびとりは、個別存在をしか生きられないが（自分の死は自分しか負えない）、心や精神において多分普遍的世界とつながりをもっている。青年期に達した人たちが、単に自己の確立に邁進するだけでなく、むしろ方向としては反対向きである普遍性というものにも関心を寄せることは、とても大切なことである。普遍的なものという舞台に立ってこそ、私たちは自らあることの意味に気付くことが可能となる。青年期はこの気付きの出発点とも言える。

人の一生とは、自らが生まれ出たことの意味の追求と捉えることができると思うが、青年期に達した人たちには、この普遍的なものへと志向できるか否かが問われている。これはかなりたいへんなことである。情報化社会の奔流は、ただでさえ「自分・自己・私」の確立を困難にさせるところをもっているわけであり（他者志向性の強化）、承認欲求の高まりがいやでも他者への一種の依存を導出する。

普遍的なものとは、恐らくいったんは自らの内に深く沈潜してこそ触れられるものではないだろうか。であるとすると、外部へ他者へと向かいがちな眼差しを、自らの内部の深みへと向けることは、なかなか難しいことになっているのではないか。外向的な性格がもてはやされがちなこの時代、青年たちの内向的な部分を支持することの必要性が高まっている気がする。

## 人間のもつ諸特徴

最後に、人間のもつ諸特徴について問われたものを総覧したい。『8)なぜ人間は他の動物より知能が高いのか(4)』、『13)なぜ人は顔が違うのか(3)』、『14)なぜ人は学習が必要なのか(3)』、『15)血液型と人の性格は関係するのか(3)』、『22)なぜ人は学ぶのか(2)』、『30)なぜ人には右利きと左利きがあるのか(2)』、『31)なぜ人は夢を見るのか(2)』、『32)なぜ人はこのような形をとっているのか(2)』、『33)なぜ人は考えるのか(2)』、『34)なぜ人は言葉を話せるのか(2)』、『35)なぜ人は2足歩行なのか(2)』、『36)なぜいろいろな人種があるのか(2)』である。

まず能力とか学習に関わるものがあるようだ。他に、身体的特徴や機能であるとか性格に関わるものがありそうだ。能力や学習を「心」に括ることができるならば、彼ら・彼女らの疑問は、「心」と「からだ」の2面に現われていると言える。

青年期においては、心もからだも特に要注目の対象である。自分はどれだけのものであるのかという自らへの問いかけは、具体的には能力や性格、あるいは身体特徴などへと向かいやすくなる。しかも自らが自らを値踏みするのではなく、もっぱら他者の視線・評価を通してそれを行ないがちである。無理もない。自分だけで下す自己評価とは空中楼閣のようなものであり、根拠を欠いている。もっとも、評価を下すこと自体の中に既に他者性が隈なく入り込んでいるわけであるから、純粹な自己評価はあり得ないわけであるが。

いずれにせよ青年期になってこそ、心やからだは注目されやすくなるという意味で輝きを増す。何を自分の「ウリ」にできるのかできないのか、判断を迫られているとも言える。成績の順位の中に、鏡の中の顔の中に、他者の自分を見る眼差しの中に、たとえばそういったものの中に自分を確かめることが多くなる。

もっとも先の諸疑問は、すべて自分の何かに収斂するというものばかりではなさそうだ。むしろ純粋に人間のもつ不可思議さに触れているものもありそうだ。そうであるとする自分への執着をむしろ絶ち、一般的知的興味が表明されているわけである。普遍的なものを目指そうとする人間のもつ大切な特質を、彼ら・彼女らも発揮し始めているということになる。

## 考 察

「人間について知りたいこと・疑問に思うこと」についての青年たちの記述を通してまず感じたことは、ごくまともに「青年期」に彼ら・彼女らはいる、という点である。「自分」というものの確立のまっただ中に、彼ら・彼女らが置かれていることがよく分かる。そして、自らを確立することにおいて、「他者」というものとの関係がとてもデリケートなものになっていることもよく分かる。合わせて、生と死、愛などの普遍的なテーマにも、彼ら・彼女らは取り組み始めていることが窺える。

しかし幾らかの懸念が無くもない。青年の自己確立は、

他者にまみれる 自己の内面世界に沈潜する（ 普遍的なものに近づく）

におけるダイナミックな往復運動を必要とするが、彼ら・彼女らの現在いるポジションが、若干「内面世界」のほうに傾きがちではないかと思われるからである。単なる内面世界への傾斜は利己的な自分を形成し、歪んだ自己愛をもたらしかねない。

傷つくことを恐れ、失敗を避けることは自然の情ではあるにしても、もっぱら「守り」にはいった自我は、内外からの衝撃に弱い。他者との距離を置こうとしたり、「感情」原理で他者判断をしたとしても、自分を守り切るには限界がある。一方大人社会へと青年たちをプッシュする力は強い（自立せよ、仕事せよ）。社会の中で「内向きカプセル世界」を作って、そこにずっと届まることは長続きせず、そうこうするうちに心身のバランスを欠くこともあり得る。

青年たちがこのような状態になってきたとして、この間彼ら・彼女らを取りまく日本の社会に、何が起きていたのであろうか。彼ら・彼女らは青年期の入り口から真中あたり（現在）までを、日本（経済）社会のバブルの破裂とその後の経済の修復・変革過程で過してきている。

社会のある種の行き詰まり・破綻に社会や大人や家族が直面していることを、彼ら・彼女らも目のあたりに見て感じてきている。世の中全体が、大人たちがかなり自信というものを失ない、それこそ内向きになっていることと、青年たちが内向きになっていることは、恐らく無縁ではない。社

会の未来が不透明に感じられれば、そこに暮す人々が「守り」に入ってもおかしくはない。あるべき社会像が不確定であればあるほど、いずれそこに参入していく青年たちは、立ち止まって様子を見るしかなくなる。

一方不確定な世の中に生きているからこそ、彼ら・彼女らは自分の「ウリ」になるものが何かということにも、敏感にならざるを得ない。これも身を守る術である。勢い他者の承認、他者の目に過敏になる。当然失敗は恐れ、傷つくことは避けねばならない。時には生き物的「感情原理」で、他者の自らにとっての適・不適を選別する。気がつくと、身の回りには同じ種類の人たちしかいなくなる。

社会情勢の変化に加え、もうひとつ考えなければならないことがある。それは人と人とのコミュニケーションのとり方である。これは先に述べた内面世界への傾斜ということとウラハラ、社会性の低下と関係することである。

人と人が面と向かって話し・関係をもつことが少なくなりつつある印象がある。他方「メール」に代表されるコミュニケーションが、かなり一般的になってきている。この交わり方の先頭を切っているのが青年たちであり、直に人と顔を合わせなくても、誰かとつながっているという感覚をそこそこ持てるようになってきている。

そこには落とし穴があるのではないかと私は考える。文字・記号・映像伝達は、それだけでは人と人との交わりのほんの一部である。トータルな交わりを残しておかなければ、多分命はしぼんでしまう。メールなどのもつ便利さ、時に他者と直面しなくても済む気安さは、マイナスの意味の内面世界への逃避を助長するのではないか。

他者にまみれてこそ、その先に個性化があるとすれば、現代青年たちは人類史において新たな人間関係構築の実験に取り組み始めていると言えなくもない。他者への愛と信頼性が十分醸成された土壌の上でその実験をするならば、人類を次なるステージへと導く冒険ともなるであろうが、その前提条件がまだ十分整っていないとすれば、ひとりひとりが孤独をかこつ社会が近い将来もたらされかねない。

現代青年は一見するとおとなしそうに見えると冒頭で述べた。そのおとなしさというものが、他者との触れ合いに対する繊細さからきているのだとすると、大人たちが何か手をかける必要があるかもしれない。もっとも、目標となるような、あるいは道しるべを示せるような大人が、青年たちのまわりに現在どれくらいいるのか、やゝ心細い気はするが。

## 注

- (1) 2005年5月31日、「人間福祉総論」の筆者担当講義に際し、先述したテーマで講義の冒頭に記述させた。回答者は124名である。
- (2) 一人の学生が、同時に複数の回答をしていることが多々あり、従って同一人物が複数項目にわたってポイントされていることもある。